

明けましておめでとうございます。



旧年中は格別なご厚情にあずかり、地域の方々及び酪農関係者に心よりお礼申し上げます。

本年も酪農を通し、地域社会への貢献を目指して社員一同誠心誠意努めていきますので、本年もなお一層のご支援お引き立てをたまわりますようお願い申し上げます。



酪農業界の機関紙である「全酪新聞」1月1日正月号にて、当社の取り組みが記事になっていましたので、紹介します。(次項参照)

# 消費者に良質堆肥を販売

## 沖縄県南城市アーミファーム(株)

沖縄県ではふん尿を処理・還元する圃場の確保が困難であるため、大半の酪農家は近隣農家のサトウキビ畑などに施肥して処理している。そのような中、南城市で酪農を営むアーミファーム(株)の中村成則代表取締役(55歳)では、ふん尿分離型システムを採用し、尿は液肥として農地へ散布。ふんは水分調整材(樹木チップ等)を使ってとろろ攪拌のみで水分調整を行い、牛ふん100%の良質な堆肥を作ってホームセンター等へ販売している。



売れ行き好調な牛ふん100%のEM発酵堆肥

尿処理は約50トンを設置し、尿浄化処理が尿処理施設の視察や浄化クに一定量溜まったら曝 出来る設備を整え、環境設備メーカーへの問い合わせ、臭いを軽減させた基準を満たした水質で、現在より優れた圃場や近くの農家の 処理を低コストで効率良 くに出来ないかを検討して いる。そのため、県外の 将来的に尿処理は浄化槽

ふん処理は、乳酸菌や酵母、光合成細菌などの有用微生物群を含むEM活性液を自社タンク(以前使用していたトバルククーラー)使用で培養。70頭の搾乳牛に約10リットル(日量)をTMRに混ぜて給与するとともに、生ふんに直接投入することで、ふんの臭いを軽減や発酵期間の短縮などの効果が得られている。発酵が完了して出来上がった堆肥は、ふんにかけて作業の中間に手作業で袋詰めしている。袋

は4kgと15kgの2種類あり、入作業する場合、4kgは約40分で100袋、15kgは1時間で50袋ほどの袋詰めが可能。堆肥は主に一般消費者向けで、県内のホームセンターや農協、園芸店等で販売しているが、評判が良くリピーターも多い。新商品の製造販売も予定している。最近では農協を通じて農家向けの堆肥販売も行なっているが、水分調整剤を使用せずに牛ふん100%でEM発酵堆肥として手間をかけて作っている分、他社と比べて価格は少し高め。にもかかわらず、使っている農家からは高い評価を受けている。今後はさらに農家向けの販売に力を入れていく



中村さん

方針。堆肥の販売実績は、月々千袋程度。現在のところ、月に30〜40万ほど売っている。堆肥を袋詰めして一般消費者向けに販売した理由について「以前は農家にバラで販売していたが、半年近くかけて作った大量の堆肥が、農家の土づくりの時期には4〜5

日てなくなってしまう。単価もかなり安いから、商売と言った処理という意見合いが大きかった。それならば、発酵段階からこだわった良い堆肥を作り、一般消費者に付加価値の高い良質な堆肥を販売すれば、一つの事業としていけるのではと考えるようになったと中村

さん。「ふん処理から堆肥販売事業と変化させているところに意味がある。その強みを活かして地道に取り組んでいる。この堆肥が広く一般に認知されるようになれば、社名も覚えてもらえる。何よもや沖縄の酪農に興味を持ってもらえるという意識を絶えず持ち続けながら、その中で少

また、中村さんは「酪農にとって地域との調和はとても大切なこと。周りの理解と協力なしには酪農を継続することは出来ない。酪農家同士の協力・連携は言うまでもないが、周辺地域に騒音や臭いで迷惑をかけているという意識を絶えず持ち続けながら、その中で少

努力を惜しまないという姿勢で取り組めば、周りの意識も変わり理解が得られる。今後もこのスタンスで酪農を続けていきたい」と堆肥処理をはじめ、酪農経営に対する地域の理解を得ることの重要性について話した。

ら、従業員不足となっていた近隣の酪農家(2戸)の搾乳作業を請け負っている。今後の方針について中村さんは「より環境に配慮した第二牛舎を建設し、牛舎見学コースや宿泊施設をその中に作りたい。また、アイスクリューやチーズなどの商品開発から販売までを手掛けたい」と話したうえで、その目的と期待について「これらの事業は一般の人と酪農の接点となり、興味を持ってもらうきっかけになるし、酪農の活性化に繋がる。夢や思いは心の中に留めず、会う人皆に熱く言い続けている。これからはもう一歩進んで行動したい」と力強く酪農への想いを語った。

# 酪農家を作る堆肥の強み

## 今では一つの事業部門に



ふん尿分離型のため、水分調整材は使わない



沖縄県内初のトンネル換気牛舎

### 搾乳作業 請負いも

アーミファームは乳牛舎で、現在、搾乳牛70頭育成20頭を飼養し、1頭当たりの乳量を飼養し、31kg。中村さんと従業員4名の5人体制で管理している。沖縄特有の腐食を和らげるため18台の大型換気扇を設置し、県内初となる本格的なトンネル換気システムを採用している。

中村さんは25年間建設業に勤めていたが、04年に実家の牧場を引き継ぎ、06年にリース事業を活用して堆肥舎を建設。08年には建設業での経験を活かし、図面から設計、施工まで自ら行って現在の牛舎を建てた。また、働き手が見つからず、従業員不足となっていた近隣の酪農家(2戸)の搾乳作業を請け負っている。今後の方針について中村さんは「より環境に配慮した第二牛舎を建設し、牛舎見学コースや宿泊施設をその中に作りたい。また、アイスクリューやチーズなどの商品開発から販売までを手掛けたい」と話したうえで、その目的と期待について「これらの事業は一般の人と酪農の接点となり、興味を持ってもらうきっかけになるし、酪農の活性化に繋がる。夢や思いは心の中に留めず、会う人皆に熱く言い続けている。これからはもう一歩進んで行動したい」と力強く酪農への想いを語った。

# 条例制定、町全体で環境保全

## 北海道根室管内 別海町



発酵副産物の再生敷 農家に販売される

家の受け止めについては「概ね理解いたたいという。ただし、1畝あたり2〜13頭以下という飼養規模の基準については酪農家の関心が高く、現時点で、これを確保できなくて水分調整にむけたJAとしての責任でやらなければならぬことだが、利益にならない部分にお金が掛かるのは酪農家にとって辛いところ」と話した。適切なふん尿・排水処理は、規模拡大で処理能力が足りなくなった場合の施設増築や、VTR施設など簡易設備の導入や老朽化した施設の補修など、排水処理では浸透